愛知淑徳高等学校
国語科教諭
広部純子

随想

上士幌にて。

帯広から北の奥に、義父の生まれ故郷である上士幌という町はある。大雪山系の東山麓、タウシュベツ川橋梁が絶景として名高い。

親戚宅は酪農家である。節くれだった指の主が地元訛りで語るには、搾乳は機械化、飼料は農協から安定品質のエサが供給され、糞尿も町営のバイオガスプラントでアウトソーシングし、出来た液肥は耕作農家に提供するという。酪農が、家族経営から町の公共事業に成長発展し、効率と安定を重視した近代化の最先端を走っていることに驚かされる。

先ごろ教材として、アイヌの長老エカシが素手で熊と対峙するという話を読んだ。人間と熊（＝神カムイ）との間にある贈与と返礼の関係を「互酬性」と表現し、今や和人にはない繊細で純粋な自然との交感を述べたものだ。（今福龍太『風聞の身体』）

その視点で上士幌の町を見直してみたとき、ああ、と気づかされた。町は公共事業という形でやはり自然と交感しているのだ、と。

例えばバイオガスプラント。牛がもたらす贈与物を、人間は乳や肉のみならず糞尿までもエネルギーとして戴き、それを液肥という形にして大地に返礼する。流行りの「自然エネルギー」といってしまえばそれまでだが、自然から搾取するのみであることを省みない経済効率優先の世の中で、それでも自然との豊かな交感が永続的に維持できるよう柔軟に形を変えながら、町全体でしなやかに生き抜こうとしているようにみえる。何よりあの節くれだった指が、自然と素手で向き合っていることを語っているではないか。

「十勝の大自然の恩恵を受けた農業酪農がさかんな町」。その根底に、今なおやはり自然との互酬の精神があることに気づいて、また訪れるのが楽しみになった。